

柳かな暮

史実談々

二つの潮流

ウイルス感染対策も

癌の対策も 昭和初期に生まれ
どちらも 流行ったが やがて
新しい流れに呑み込まれて行つた

嫌気漂ふ大地も



土の香り 森の香り

結核菌

今から百年も前

当時は 不治の病は 結核であった
それは 結核菌によるものだった

また 当時には

微生物が吐き出す天然有機化合物を
薬品にする そんな発想もなかった

土の好気や 森の香りに魅了された

ワックスマンは 土壤の放線菌に着目
大地の好気も 森の香りも

放線菌から放出されることに

やがて ワックスマン博士は
放線菌からストレプトマイシンを発見

これが

当時の不治の病の『結核』を治した
ノーベル賞受賞である

当時の不治の病の『結核』を治した
ノーベル賞受賞である

放線菌ブーム

その放線菌は

千種類以上あると言はれてゐる

世界は

人類に有効な天然有機化合物を吐き出す
『放線菌』探しに動いた

しかし 見つからない

それでも

あてもなく偶然を頼りに探し
探すのに莫大な費用がかかった

しかし みつからない

結果 放線菌ブームは 去つて行つた

それから五十年後

静岡県の川奈ゴルフ場の土壤から
新種の放線菌が発見された

発見者は 大村博士である

十井の色葉字
青人草

発行
つるばみ
郵番
四三八一〇〇八六

住所
磐田市見付二七八六

電話
〇五三八一三三一〇二七三

電信
logos@mvt.biglobe.ne.jp

編者
カナ
岩田修良
アリ@ ドレスドット

エバーメクチン

この新種の天然有機化合物に
名前がついた

『エバーメクチン』である

その薬品転化に成功したメルク社は
その薬を『イベルメクチン』と名づけた



救済に 繋がった

一九九〇年代になると

癌にも有効作用すると 言はれ始めた

二つの発電

嫌気性の発電

さて 人の体温は

ミトコンドリアで作られてゐる

それは 一つの細胞の中に数千もある

土壤に

好気性の菌と 嫌気性の菌があるやうに

ミトコンドリアの発電も

好気性の発電と 嫌気性の発電がある

細胞内が酸素不足になると

嫌気性の発電が行はれるが

どういふ理由か まだわからないが

酸素が十分足りてゐる状態でも

嫌気性の発電が盛んになることがある

この発電が盛んになって

正常細胞が『癌』になる

発見者は ワールブルグ博士

しかし

数千にも及ぶ癌治療仮説は 検証されず

癌＝ミトコンドリア不全説は

下火になり 代はつて登場したのが

癌＝遺伝子の突然変異説であった

ワールブルグ博士は この発電を

『解糖系のエネルギー』と呼んだ

ノーベル賞受賞

この発見で

この無酸素の発電を

正常発電の好気性の発電と対比させ

嫌気性の発電とした

平成二十二年(二〇一〇)
アメリカの

トマス・セイフリード博士が

こんな実験結果を公表した

癌＝ミトコンドリア不全説が 弘まり

癌治療仮説が登場した

これで癌が治せる 研究者は萌へた

ミトコンドリア不全再燃

癌細胞の『核』を

正常細胞に移植しても

正宮絶用に『病』いかに考へて

癌細胞の『ミトコンドリア』を

正常細胞は『癌』になる

この実験が公表され

癌＝ミトコンドリア説が再燃

再びミトコンドリアに注目した

癌治療に新説登場

フエベンダゾール

イベルメクチン

体内の細菌　もしくはウイルスが

シトニントリアの妨害性発電を妨害する

三ノ木新説文庫

これが引き金となつて『癌治療』に

卷之四

博士は
かう言ふ

癌は
寄生虫ではないか

ミトコンドリアの

正常好気性発電を阻害してゐる

と素人ても

寄生虫薬が【癌】に効く道理がわかる

そんな現世ご利益優先だ

好気性の発電が盛んになればいい

どうしてか？

ネット上で見つける

ここは 今の私には不明だが
イベルメクチンが

つまり 治る絡繹（からく）り

再発耐性癌

ポール・マリク

さて

癌の現場治療の一番の悩みは

『再発耐性癌』だと言ふ

抗癌剤・放射線治療・摘出

どの対処をしても

『再発耐性癌』のリスクがあり

どうしたら いいか?

これが 悩みの種だと聞く

摘出手術における『再発耐性癌』の

発生リスクを下げる

転用薬を見つめたのは

コロナ感染の

特効薬イベルメクチンを見つめた

ポール・マリク博士である

ダイヤモンドプリンセス FLCCC

私たちの記憶に新しい

ダイヤモンドプリンセス号

この頃 マリクは

バージニア州の医科大学で

集中治療の責任者だったため

コロナ対策の治療手順の開発を急いだ

当初は 医療敗血症の治療手順を踏んだ

しかし 結果は(?)

この時 海を越えた大陸

オーストラリアのモナシュ大学が

コロナウイルスに

イベルメクチン有効の論文公表

FLCCC (新型コロナ救命治療最前線同盟)

これを見たマリクは

イベルメクチンの利用に踏み切った

オリンピック開催前

ビタミンD

無観客の東京五輪開催前の六月

マリクたちは

世界各国で イベルメクチンが

数週間でコロナ鎮圧する実情を引き

イベルメクチンを使った

コロナ鎮圧を 五輪組織委員会に提言

しかし 現実は…

マリクたちの意見に

耳を傾けることはなかった

ますます 人々は健康を損なったと言ふ

新説

確かに 日光は

皮膚癌を誘発することがある

しかし それは良性の腫瘍であって

日光は 悪性の黒色腫を退治する

だから 日光は体にいい

常識反転

ビタミンD

遺伝子操作のワクチン停止を訴へてゐる

福島雅典教授が

平成二十二年（二〇一〇）頃

西洋の学者が

ビタミンDパンデミックを警告

日本でも話題になり

コロナ騒擾が起き

世界中が ビタミンD不足の所に

しかし 現実は…

マリクたちの意見に

耳を傾けることはなかった

もつともつと

科学に無知である自分を自覚し

謙虚に 事実に向き合ふべきだと言ふ

常識反転

ビタミンD

ビタミンD2～D7の六種類
体に良い働きをするのは
キクラゲに多いD2ではなく

お日さまにあたり 皮膚で合成される
ビタミンD3であつた

日光は体に悪い

何故なら 日光は

癌のリスクを高めるからだ

それは

シラス・さんま・鮭・鰻に多いらしい

下段からは

慈恵医科大学附属柏病院の

『ビタミンDの基礎知識』

「癌との関連」の要約縦書き詩文

気になる摂取量

アメリカとの比較

ビタミンD基礎知識

動物と植物

我が国のビタミンD₃の推奨量は

一日 五・五マイクログラムだが
一日の上限を百マイクログラムと幅広だ

海外はもとより 国内でも
多くの住民が

ビタミン欠乏や ビタミン不足に

陥つてゐる現状からみると

一日五・五マイクログラムでは 摂取不十分

ところが

市販されてゐる多くのサプリメントは
一日五・五マイクログラムと記載され

これで必要量の百分比充足と記載
この常識を疑ふべし

自分のビタミン濃度を知らずに
適度な摂取量を判断すること不可

我が国

十八歳以上 五・五マイクログラム

妊婦 七マイクログラム

授乳 八マイクログラム

上限 百マイクログラム

米国

九歳～七十歳 十五マイクログラム

七十一歳以上 二十マイクログラム

上限 百マイクログラム

ビタミンD₁＝D₂～D₇の六種類

ビタミンD₁＝間違った化合物に命名

その後取消 存在無

体内で重要な働きをするのは

ビタミンD₂とビタミンD₃の二種

春から夏にかけて
紫外線が多いお昼頃

三十分程度顔や手足を日光にさらす

これで十分なビタミンDが

皮膚で生成される

しかし ビタミンDの半減期は

一日～二日乃至二・三週間

ビタミンD濃度を知らずに
適度な摂取量を判断すること不可

動物 動物

七一デヒドロコレステロール：①

→ →

ビタミンD₃の前駆体

プロビタミンD₃（異称）

紫外線に『①』が照射され＋体温で

← ← ←

ビタミンD₃が生成される

エルゴステロール

←

紫外線と熱

ビタミンD₂が生成される

インド ウッタル州

インド北部の人口二億余りの
ウッタルプラデシュ州は
早期に イベルメクチンに注目し
ビタミンDとイベルメクチンを
住民に無料配布して
コロナを数週間で鎮圧

ビタミンD欠乏症

マイケル・ホリック博士は
この論文で 摂取量の変更を
かう語る



単位

一ダラ
= 一円玉の重さ
一ミリダラ
= その千分の一
一ミクログラ
= 一円玉の百万分の一
一マイクロダラ
= 一円玉の百万分の一
= 〇・〇〇〇〇〇一ダラ

ビタミンDの歴史

文政五年（一八二二）

異国船打払令が発令される三年前
ポーランドのスニアデッキ博士は
くる病に伴ふ骨格変形を予防するには
日光浴が重要であることを主張

ビタミンDの国際単位
一IU = 四〇マイクロダラ
たとへば

五マイクロダラ = 二〇〇IU
二五マイクロダラ = 一〇〇〇IU
一万IU = 二五〇マイクロダラ
五万IU = 一二五〇マイクロダラ

くる病とは：
骨の石灰化形成不全・骨軟化症（異称）
その症状は：
子供では
・頭蓋骨を指で押しただけで凹む程柔らかい
・乳歯の生えるのが遅い
・虫歯になりやすい
・身長が伸びない
大人では
・いろんな関節が痛くなる
・背中が痛い

ビタミンD欠乏症

欠乏対策

昔

- ・いろんな関節が痛む
- ・背中が痛い

今

- ・いろんな関節が痛む

- ・背中が痛い
- ・癌

- ・糖尿病
- ・心の病

- ・その他の慢性疾患

日光浴

高濃度のビタミン補給

ビタミンD過剰摂取

過剰摂取は稀な疾患である

①一日／一万IU×六ヶ月

②一日／百万IU×六ヶ月

△千IUを間違へて

△百万IUにしたらしい

一日／一万IU×六ヶ月も

一日／百万IU×六ヶ月も

今まで見て来た数値から有り得ない

一日上限四千IUだから：

大正八年（一九一九）

第一次世界大戦で

日本が南洋諸島を手に入れた頃

ウイーン大学のフルトシンスキーは
人工的に作り出した紫外線を使って
くる病の子供たちを治療した

百万IU＝二十五〇〇〇マイクロダ

一万IU＝二五〇マイクロダ

ビタミンDの歴史

明治二十五年（一八九二）

秩父事件から八年経った頃
海の遠くイギリスのスコットランドや
欧洲北部に住む子供たちは

まだ くる病に苦しんで居た

英國の研究者バームは

くる病の地域分布から

くる病と日照量に関係があることを

ハッキリと見出した

大正十年（一九二二）

コロンビア大学のヘスとアンガーは
くる病の子供たち数名を
ニューヨーク市の病院の屋上の
日光浴で 治してみせた

同時に

動物に与える餌の日光照射でも
くる病が治ることを実証した

骨軟化症（くる病）は

・紫外線照射でも治るし
・日光浴でも 治る

やがて 「酵母」に存在する
「エルゴステロール」を

「紫外線照射」すると
「別の物質」になることが解ってきた

ビタミンD₂誕生

ビタミンD₂の誕生である
エルゴ・ステロール（酵母の物質）

紫外線照射

エルゴ・カルシフェロール

俗に

ビタミンD₂前駆体

紫外線照射

←

ビタミンD₂

昭和五年（一九三〇）頃であった

くる病根絶！

牛乳に「エルゴステロール」添加

←

「紫外線照射」

←

「D₂牛乳誕生」の時代から

←

ビタミンD₂の登場で

エルゴステロールに代はって

牛乳に直接ビタミンD₂が添加され

←

くる病根絶時代を迎へる

←

ビタミンD₂

ビタミンD₂時代

一九八〇年代

昭和五年（一九三〇）頃から

米国では

・カスタードクリームや

・ホッドドッグ

・ビールにもビタミンD₂は添加され

ビタミンD₂全盛時代を迎へた

しかし 昭和二十五年（一九五〇）

英國で 高カルシウム血症集団発生

ビタミンDの過剰摂取の疑ひかかり

英國ビタミンD強化の禁止に始まり

歐州諸国も これに続いた

そして平成一九年（二〇〇七）

マイケル・ホーリック博士の

ビタミンD欠乏パンデミックが出る

しばらく ビタミンD強化は冷えた

この頃から日本人のビタミンD不足が

できるだけ太陽に当たらない

こんな健康指導が流行だした

この頃から日本人のビタミンD不足が

急激に増加

今では 日本人の

九〇%がビタミンD不足と言はれてゐる

さらに…

ビタミンD強化再燃

インド・米国・カナダ・フィンランドで
再びビタミンD強化はじまる

平成二年（一九九〇）頃から

スウェーデンとフィンランドでは

ビタミンD強化は始まつてゐたが

これは

高緯度による慢性的なビタミンD不足を

自覚してゐたためだと思はれる

体に有効なビタミンDは

ビタミンD₂とビタミンD₃

ビタミンD₂の化学合成には触れたが

ビタミンD₃の化学合成には

まだ触れてゐなかつた

ビタミンD₃の化学合成

体内天然合成

皮膚の七一デヒドコレステロールが

← ←

紫外線照射され

← ←

ビタミンD₃が合成される

化学合成

ラノリン（羊毛の脂質）

← ←

紫外線照射され

ビタミンD₃

愛媛大医学部の見解

臓器細胞にも

ビタミンD受容体があることがわかつた

受容体とは

細胞外壁に付着した

電気コンセントのやうなもので

ビタミンDが

さまざまな細胞に付着することで

細胞増殖や分裂

細胞の自爆死や免疫調節など

生体機能に関与することが明白となつた

ビタミンDの抗癌作用は
①増殖 の低下
②血管新生の低下
③転移 の低下
④癌細胞の自爆死誘導

ビタミンDの補給は

ほとんどの癌に有益性が高い

ポール・マリクの見解

ほぼすべての免疫細胞が

ビタミンD受容体を所有してゐる

よつて

ビタミンD₃は

白血球・NK細胞・好中球を活性化

ビタミンD₃は

さまざまな細胞に付着することで

細胞増殖や分裂

細胞の自爆死や免疫調節など

生体機能に関与することが明白となつた

ビタミンDの抗癌作用は
①増殖 の低下
②血管新生の低下
③転移 の低下
④癌細胞の自爆死誘導

ビタミンDの補給は

ほとんどの癌に有益性が高い

カナダの主張

カナダのある病院では
多くの患者にビタミンDを投与し
インフルに罹る患者が少ないと言ふ
そこでは
「ビタミンDのハンマー」といふ名の
インフルエンザの治療がある

ビタミンDを5万IU（二二五〇マイクロダラム）

もしくは

ビタミンDを一万IU（二五〇マイクロダラム）

一日三回×二・三日

日本では二五マイクロダラムが基本だから

四八時間×七二時間で

インフルエンザの症状を完全に鎮圧

さう　豪語する

最大服用量

一万IU（二二五〇マイクロダラム）／日
最大五ヶ月投与でも
毒性は認められず安全といふ報告あり
一日八万IU（二千マイクロダラム）まで
安全と言はれてゐる

こんな報告があるから
カナダで　一回五万IU投与有り

だから　海外では
一錠五万IUのサプリも市販されてゐる

早く　この馬鹿げた
インフル対策を克服しなければ
国民の健康と共に
医療財源も　守ることができない

mRNAウイルスの研究を進めてゐる

話を紹介し

「早くワクチン開発を！」

こんな内容だった

イベルメクチンの薬効も

ビタミンDの薬効の可能性を探ることもなく

高額なワクチンの開発を誘導する

NHK

日本の異常

インフルエンザの抗ウイルス薬の
消費量は　世界第一位
その消費量は　世界の七五%

半年位前か？

クローズアップ現代で

一来るべき新しいウイルスに備へる

こんな特集を見た

エボラ熱と

ベトナムの洞窟に潜む新種のウイルスを

長崎大に輸入し

話を紹介し

「早くワクチン開発を！」

こんな内容だった

NHK　クロ現